

第2次熊本派遣 活動報告

報告者：藤室玲治（課外ボランティア活動支援センター）
今本亘（文学部2年、SCRUM）
大庭佳乃（文学部1年、SCRUM）
渡邊勇（工学部1年、SCRUM）

※SCRUM:東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室学生スタッフの総称

第2次熊本派遣参加者

- 藤室玲治（課外・ボランティア活動支援センター特任准教授）
- 西塚孝平（教育学部3年、HARU）
- 今本亘（文学部2年、SCRUM）
- 大庭佳乃（文学部1年、SCRUM）
- 渡邊勇（工学部1年、SCRUM）

※SCRUM:東北大学東日本大震災学生ボランティア支援
室学生スタッフの総称

活動報告の流れ

全体の大まかな流れ
の説明



それぞれの活動の詳
細な報告



感想・今後の課題

活動報告(6月2日)

- 藤室(教員)熊本入り
- 熊助組代表太田さん・副代表林さんと打ち合わせ
- 足湯ボランティアをするサンライフ熊本避難所・城東小学校避難所にて打ち合わせ

活動報告(6月3日)

- 今本・渡邊熊本入り(14:30頃)
- 熊本大学にて打ち合わせ
- 足湯ボランティアの物品準備等
- 城東小学校避難所にてチラシ貼り、避難所の方と交流(夕食もいただく)
- 藤室先生のみサンライフ熊本にチラシ貼り
- 西塚・大庭熊本入り(23:00頃)
- 城東小学校にて宿泊

活動報告(6月4日)

- 熊本大学にて熊助組(5名)と合流
- 大津町のボランティアセンター
- 被災された方の家の片づけ、交流
- 城東小学校避難所にて足湯ボランティア活動(東北大5人、熊助組3人)

活動報告(6月5日)

- 熊本大学にて熊助組4名と合流
- 御船町のテント村「アウトドア・コミュニティみふね」の引越しの手伝い
- 熊助組の4名と昼食・交流
- サンライフ熊本避難所にて足湯ボランティア活動(途中で西塚・大庭は帰仙)
- 熊本大学にてミーティング
- 博多にて宿泊、翌日帰仙

活動報告の流れ

全体の大まかな流れ
の説明

それぞれの活動の詳
細な報告

感想・今後の課題

それぞれの活動紹介

- 熊本に着いた時の印象
- 大津町での活動
- 城東小学校避難所での活動
- テント村での活動
- サンライフ熊本避難所での活動

被災状況・視察(熊本市内)



- 熊本駅に着いた印象
→「あれっ、被災地？」
- 被災状況の異なる建物が混在

被害状況・視察(熊本市内)

一見被害がなさそうに見えるが...



被災状況(益城町・大津町等)

- ・ほぼすべての家にブルーシート
- ・ほぼすべての家が目に見えて大きな被害



被災状況・視察（前回派遣と比較）

- 外に出されていたごみはだいぶなくなった。
- ブルーシートの家が多さなどは前回派遣とあまり変化なし



（写真は前回派遣時に撮影したもの）

熊本市避難所の状況（派遣時）

避難所の集約が進行中。（集約先予定避難所22か所）

しかし、派遣時にはまだ60か所の避難所が存在していて、集約が進んでいる状況ではなかった。

また、派遣時に仮設住宅第1号が完成。

城東小学校避難所→集約先ではない避難所

サンライフ熊本→集約先避難所

4日 大津町での活動

被災された家の中の片づけ・交流

- 熊助組5名 + 東北大5名
- 家の中にあるものを分別してゴミ袋に詰める
- 災害ごみとして捨てられるものをトラックで捨てに行く
- 休憩がてら、住民の方(おばあさん(80代)、息子さん(60代))とお話する

4日 大津町



- 全壊 111棟
- 半壊 918棟
- 一部破損
2,059棟

(6/5現在 災害対策本部会議資料 熊本県HPより)

画像元

(<http://map.goo.ne.jp/img/pre fmap/43.gif>)

4日 大津町

- 大津町ボランティアセンターへ行き、オリエンテーションを受ける



4日 大津町

ボランティアセンターの様子

- 愛ことば「被災財を見らんで、人ば見る！おっ
たちが何とかしたかとは人たい！」
- 活動3割、お話し7割
- 「作業」ではなく「活動」
- 「瓦礫」ではなく「被災財」



→被災者に対する配慮がしっかりしている

4日 大津町

活動の様子

- おばあさん:「全部捨てちゃってください」

「これはどうしますか？」

質問をしながらの活動を通して、思い出話ができたり、
とっておくという選択肢を与えることができた

- ボランティア:黙々と作業を続ける...効率重視の様子
→コミュニケーションの大切さが理解されていない
→ボランティアが被災者を焦らせてしまい、震災に向き
合うことを妨げてしまうのでは

学生が聞き役になれた

4日 大津町

- 木材、金属など種類ごとに大きな山
- 集積所へ行くと、「ごみ」の扱い



4日 大津町

活動後のお話しを通して

- おばあさん: (戦時中の話で)
「話だけじゃ分かん。体験せんと。」
- 息子さん: (学生に対して)「結婚して家族を持って、家を持ってみないと、この難しさは分からないですよ。壊すかどうか、そう簡単に決められることじゃない。」

ハード面の活動でも、
心に寄り添う態度の大切さを伝えていく必要がある

城東小学校避難所

足湯ボランティア

夕食・宿泊などを通して暮らされている方と交流



城東小学校避難所

- 集約先ではない避難所。20人ほどが生活（派遣時）
- ボランティアが運営



城東小学校避難所

- 他に類を見ない生活環境の良さ



↑
段ボールベッドが完備

マッサージ器などの健康器具もあり↑

城東小学校避難所

- 良好なコミュニティができていた。



写真は城東小学校ウェブサイトから
(<http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/school/e/jotoes/hinajyo/tur ezure.htm>)

避難所で暮らされている方の声
「マンションに住んでたから人づきあいが少なかったけど、避難所では新しくできたお友達から『おはよう』や(仕事に行くとき)『行ってらっしゃい』とたくさん声をかけられる。だから楽しく生活できているんです。」
「被災したマンション(自宅)の清掃が終われば元の生活に戻るのに、避難所で得られた交流を失うのが不安。」

城東小学校避難所

～「つぶやき」からみる避難所生活～

- 「連休までは『死の街』だったの、もうみんな言ってた。連休になって人が来てくれたりしてそうじゃなくなったけど。」
- 「ここは奇跡の避難所。本当に感謝しています。」
- 「私は市役所で避難してたときは、ストレスで倒れて救急車で運ばれたのよ。」

城東小学校避難所

～「つぶやき」からみる避難所生活～

- 「若い人と話すと元気をもらえるから、どんどん話したい。知り合った若者が頑張ってくれれば私も嬉しい。」
- 「一人暮らしなので、こちらに来るのが楽しいし、安心する。」
- 「今でも地震が来ると大きいのが来るのではないかと身構えてしまう。」

城東小学校避難所 ～小学校との「共生」～

小学生と避難所の方間での交流

- ・毎朝一緒にラジオ体操・ダンス
- ・頑張ろう交流会(5/14)などイベント多数！

こんなつぶやきも

「朝子供たちと一緒に踊るのが今の生きがい。」



写真は
城東小学校HPから

城東小学校避難所 ～小学校との「共生」～

小学校と避難所の方間での交流



小学校教員と避難所住民で
ソフトボール大会

写真は
城東小学校HPから

福幸(ふっこう) 作詞:城東小学校児童、DJベン 作曲:DJベン

今までの世界は幸せすぎたのかな
入学して3日 突然世界が変わった
がんばるばい(がんばるばい) 突然起こった揺れに耐え
まけんばい(まけんばい) 眠れぬ夜の車中泊
(※)がんばるばい(がんばるばい) まけんばい(まけんばい)

ここから始まる未来の一步

今までの世界は幸せすぎたのかな
できたばかりの 友達どうしてるかな
がんばるばい(がんばるばい) 朝も早よから作ってくれた
まけんばい(まけんばい) 心のこもった炊き出しの味
(※)繰り返し

今までの世界は幸せすぎたのかな
段ボールベッドの箱の中の夢 悪いことはずっと続かない
がんばるばい(がんばるばい) みんなにもらった優しさを
まけんばい(まけんばい) 僕らも誰かに届けよう
(※)繰り返し

今はもう怖くない パパとママがいたから安心したよ
生まれ、生まれ、生まれ、生まれ、生まれ、生まれ



城東小学校避難所



城東小学校避難所 まとめ

- 笑顔あふれる理想の避難所
- 足湯ボランティアに限らず1人1人とお話させていただく中で、話を聴く外部の存在が必要であることを改めて認識。
- 単純に私たちのような若い世代が訪れるだけでも、パワーを与えられることがわかった。特に子供が与えているパワーの大きさに気づいた。

5日 アウトドア・コミュニケーションみふね

私たちが行った活動

テント村の引越しの手伝い

参加者

熊助組5名＋東北大5名＋全国各地からの
ボランティア約60名



5日 アウトドア・コミュニケーションみふね

日中は誰もテントにいない

→今回テント村の住民のお話は伺えなかった
御船町で実際に被災された方でボランティアをされている方と交流できた。

→かなり前向きで、今後の御船町のことを考えておられた。一緒に活動して逆に元気ももらった。

全国からのボランティアと交流できた

5日 アウトドア・コミュニケーションみふね



5日 サンライフ熊本での活動

足湯・避難されている方との交流

- 熊助組5名 + 東北大5名



5日 サンライフ熊本



中央区黒髪

画像元
(http://www.manyou-kumamoto.jp/users/images/120315141705_S220240.jpg)

5日 サンライフ熊本



画像元 (<http://www.kumasun.net/sunlife/sun2.htm>)

- 熊本市勤労者福祉センター
 - 市の要請で「拠点避難所」(集約先の避難所)としてゴールデンウィークごろから開設
- 避難している方同士の地域的なつながりが希薄

5日 サンライフ熊本

生活環境として

- 背の高いカーテンで仕切り
 - プライバシーが守られる
 - どういう人が中にいるのか分からない
 - 避難している方同士のコミュニケーションが少ない



画像元

(<http://kumanichi.com/news/local/main/20160502016.xhtml>)

5日 サンライフ熊本

- つぶやき
- 「前の避難所の方がよかった。段ボールベッドがあつて。ほかの避難所ではマットに寝て仕切りがないところもあるから贅沢は言えないけど。」

5日 サンライフ熊本

- 昼は外へ出ていて、夜帰ってくる人が多い
→避難者同士のコミュニケーションが少ない
- スタッフ(市職員)との関係？



画像元

(<http://www.kumasun.net/sunlife/sun2.htm>)

5日 サンライフ熊本

- 交流スペースに人はおり、会話もしている
- 一人が学生に不満を話し始めると、他の人はちょっと困った様子で席をはずした
 - まだよそよそしい
 - 踏み込んだ話を話せる相手がいない

話し相手として学生が入る必要性
一対一で話す機会として足湯活動は良い

5日 サンライフ熊本

- つぶやき
- 「役所の職員でも、言っている事が違う。」「逆の立場だったらどうするの？こんな役所の人がいたら殴りたくなるでしょう?!」
- 「ボランティアに感謝しているが、母の形見を捨てられた。」

5日 サンライフ熊本

足湯活動を通して

- 足湯をして涙を流したおじいさん：「最高でした。」
- 医療チームの巡回がない

ボディケア、メンタルケアの両面で効果的だった。ニーズがあるのではないかと

- 九州の方言の話

地元の学生がやることによる話しやすさ、話題の広がりがある

→熊助組に今後も継続的に足湯活動を行ってもらうのがベスト



活動報告の流れ

全体の大まかな流れ
の説明

それぞれの活動の詳
細な報告

感想・今後の課題

熊助組の方の感想

- 「ボランティアは今回初めて。足湯で人と関わる中でボランティアっていいなと思った。」
- 「被災地の方とボランティアを通してコミュニケーションをとって明るく振舞われている姿を見て、すごいなあと思いました。自分たちの家も被害を受けているはずなのに、地元のために動いている方が多くて私たちも何かできることをもっと探したいと思った。足湯ボランティアでは、避難所の方々と話をして、私たちのほうが元気づけられ、とても楽しく活動できました。」

熊助組の方の感想

- 「全国から多くの方がボランティアに来てくれているので、本当感謝の気持ちでいっぱいです。東北大学の学生さんもありありがとうございました。熊本もいろいろな人の力を借りながら頑張っていく手伝いができるようにしていきます。」
- 「今まではハード面などの片づけるボランティアが多く、ソフト面のボランティアは初めてでした。『足湯』をするのは少し抵抗があったし、ちゃんとできるか不安だったけど、とてもやりがいのある仕事で、参加してよかったです。」

熊助組の方の感想

- 「どこのボランティアに行っても感じるのはいっぱい人と人とのつながりだと思いました。」
- 「避難所生活の中でもみんな前を向いて活動していることが分かって前に進むしかないということ、自分自身の目でみて、体験することができて本当によかったと思います。」



熊助組の方の今後したい活動

- 「被災者の方と交流したい」、「避難している方ともっと交流したい」、「被災地の方々を元気づけられるような活動をしたい」との声が2日目に一緒に活動した熊大生からいただけた。



ハード面だけでなく、普段東北大生が行っているソフト面へのボランティアの必要性、被災された方に寄り添うこと・被災された方とのコミュニケーションの大切さを感じてもらえた。

今後の熊本での課題

寄り添う傾聴ボランティアが必要

心の復興のために、ご自身で震災体験を整理し、向き合うことが必要。

そのためには誰かに話すのが効果的！
しかし、被災者間では話しずらい一面も

そこで

話を聴く外部の存在が必要！

1対1でコミュニケーションがとれる足湯ボランティアが最適。また、話を伺うことで震災を身近に体験でき学ぶことができる

今後の熊本での課題

「ボランティアの本質はコミュニケーション」を
一緒に活動していく中で伝えていくこと

今回ハード面の活動でも被災された方に寄り添う姿勢の大切さを学んだ。どのようなボランティアであれ、被災された方に寄り添うのが何よりも大切であることを自分たちの態度で伝えていくべき。

今後の熊本での課題

移行期におけるコミュニティ形成

避難所から集約先避難所への移行期

避難所から仮設住宅への移行期

→コミュニティの崩壊

→コミュニティ形成支援が今後ますます
必要に！

でもこれらって熊本地震に限っ
ての問題ではない！

今後の展望について

今私たちが活動している陸前高田市などでは
仮設住宅から復興公営住宅への移行期。

私たちはコミュニティ形成支援・傾聴ボランティア
を現在行っている。

今、熊本では避難所から仮設住宅への移行期！

→同じようにコミュニティ形成支援・傾聴ボランティ
アが必要！

→東北大生の得意分野・ノウハウが生かせる！

→東北の経験を熊本に！！

今後にも継続的に訪れ、一緒に活動していく中
でこの経験を伝えるべき

第2次熊本派遣によって 東北大生が得られたこと

発災1か月半後に被災地を訪れることができ、
実際に身をもって現状を知ることができたこと。
また、熊本地震を身近に感じることもできたこと。
熊本地震と比較することで、改めて東日本大震災
を考え直すことができたこと。

何よりも被災された方に寄り添うこと・被災された
方とのコミュニケーションが大切であることを実感
できたこと。そして、それを東北での活動に活か
すことができたこと。(清掃ボランティアの例)

ボランティア間でのつながりができたこと。Etc.

質疑応答